

## 四月作品

## 月集スバル

☆今月の四人☆

水またぐ橋

桑原正紀 東京

石神井川は橋おほくして三キロの間に二十の小橋を数ふ  
小橋なれど入口（漢字）出口（かな）書き分けてあり橋名板に  
農民の生活たつきに添ひて江戸期よりここに黙つて水またぐ橋  
文政の銘ある石のお不動さん橋のたもとにしかめ面せる  
堰守さきもりの婆のゆかりの松とのみ伝へられ立つ太き黒松

本当のこと

福士りか 青森

怖れたるその日は来たり十年に一度の寒波押し寄せる日に  
新聞のお悔やみ欄にも記載なく吹雪に紛れて行つてしまひぬ  
ベートーヴェンピアノソナタ十二番第三楽章を「葬送」と名付く  
内田光子弾くベートーヴェン雪しまく津軽冬野を棺と思ふ  
もうゐないやうな今でもゐるやうなたぶんどちらも本当のこと

よき土

風間博夫 千葉

アスファルトの裂け目の土はよき土でポピー一本伸びて花咲く  
自販機を開けてピン・缶入れる人入れ終はり閉める（売切れ）消える  
東京メトロ千代田線地上に出てわたる荒川 帯のみのりの車体  
ジュラルミン色の電車の一編成かがやき走る西日を受けて  
選歌受くる一首をしるすボールペン、葉書一葉、われを待つポスト  
明るい未来 小田部 雅子 静岡

右隣、左隣に赤児泣き明るい未来あるごとき、町  
懐妊の夢にあわてて目が覚めぬ道義なき世の先の先はや  
古新聞結びつつ内に折りたたむ勝手に増える軍事費の記事  
戦闘機買つてあやしき傘のした民の暮らしの細りゆく国  
枯れ野ゆく足裏がそつと聞きとめぬ春はまだまだ春はそろそろ

☆

☆



奥村晃作\* 東京

水島晴子 兵庫

裏みちに向きたるドアがひらかれて搬びこみをり白百合あまた  
植込みに鳥あそぶ路うつつなき老女がきのふ遁げゆきしみち  
さづかりし身体髪膚はうだいに傷つけてなほ今在る不思議  
一月四日夕の食事に集ひくる令和五年に漕ぎ出でて老いら  
Amazonの空き梱包がけふもまた捨てられてゐてホームしげし

武田弘之 神奈川

「ひでえ子」と自称する宮英子さんよき歌あまた詠みたまひけり  
宮夫人在さず超絶駄洒落なき編集室となりてゐにけん  
宮柊二・英子夫妻に仕へたる五十五年がわが宝なり  
ウクライナ侵攻止まずコロナ禍もまだ収まらず年あらたまる  
庭隅に黄の色淡く臘梅の花々咲けり水仙はまだ

高野公彦 千葉

良き言葉「人生いろいろ」その唄を歌ひし人はいま黄泉に住む  
補聴器も杖も要らない老い我の欲しき物あり補脳器、走力  
〈フーテンの寅〉が〈プーチンの寅〉に見え悪しき年なり令和四年は  
火と水を良き友として鰐男われキッチンで作る日々三食を  
白露も白萩もまた白萩も白の分身 言葉は銀河

森重香代子 山口

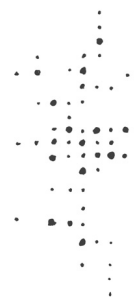
子の傍に安らふわれか宵はやく眠りに落ちぬ歳旦の夜を  
泥突き山禽あそぶ子の家に安けくぞをり年のはじめを  
木斛の冬木の傍さむざむと水湛へたり巨き手洗石

日影康子 富山

子の家に留守居してをり吹く風に庭の葉蘭のひらめき止まず  
ポストに深く手を差し入れて持ちて来し封書を人の落としてゆけり  
年の瀬の御堂掃除にわれも出て障子のつくりろひ暫く手伝ふ  
百五十畳の御堂掃除に雑布を洗ふはおほかた老わが仕事  
日の高きうちに手足の爪切らむ師走の空のきりりと晴れて  
冬の寺の留守居はさみし女関へ出づればポーチに小包置かる  
学生時代に住みし京都を思ひ出し全国高校駅伝なつかしく観る

影山一男 千葉

コスモスに抛りて生き来し五十年良きことのみを振り返りゐる  
大志なく歩みて来しを笑ふなよ愚にして凡の歌人ひとり  
末枯れたるあぢさる並ぶ通学路チyunチyun歩きの鶴鶴あそぶ  
街川のごゑを聴くごと竹める老い人さむし冬の日向に  
寒き日を飢えつつ歩む者ありてメタバース住民の咲笑



狩野 一男 東京

生きにゆくインフォームド・コンセント栗原悲しい滝で止まつた  
かつかつに七十二歳になるだらう二〇二三年迫りつつあり  
新しき年に入りたり復活を期待してその走り見るべし  
第99回東京箱根間往復大学駅伝競走結果まづまづ  
われ生きて真紅の襷 一冊の歌集出すこと能はざるや否や

宮里 信輝 神奈川

何百万年かけ海より来たる島丹沢山塊、伊豆半島は  
一年に数センチうごきアフリカをはなれていまは南アメリカ  
ユーラシア大陸アメリカ大陸が恋ひあひひとつ三億年後  
いづこにも住み得るヒトよ砂漠、熱帯、高地さらには極地にまでも  
森林の伐採、オゾン層に穴、海温上昇、ヒトが病ます星

小島 ゆかり 東京

同年の友の訃報はふいに来て、またふいに来て寒すぎる今日  
通夜の酒ふくみ出づれば夕風が夜風になりて青い星降る  
大寒の半月しろし片方の半月を持ち友は逝きしか  
亡き友の話をべつの友として死んだのだけかわからなくなる  
人の世はA Iに任せわたしたち、ねえ、原始音楽にならうよ

木畑 紀子 京都

コンピニを出づれば遠に比叡見えいつもいつも手を合はせたくなる  
山茶花のゑらぎはじめ冬百日かたはらにある幸をおもへと  
老衰により父百歳で永眠と旧友の喪中葉書はうすすべに  
太陽も比叡二峰もくもがくれて寒い朝ひたすらあるく  
雲きれて射すお日さまをよろこぶは冬のたんぼば黄の三輪

島田 暉 神奈川

空襲の逆巻く炎に逃げ走り背中炎を負ひて奈落へ  
マツチ擦る束の間なれど空襲の炎の奈落覚ます記憶は  
焼けあとの黒き焼け木にふさがれて戦争さらふ赤鬼となる  
空襲に帝都の市街焼かれても少年は勝つと日の丸掲げぬ  
白鳥がわれの心に来て憩むその時私はしづかなる湖

大松 達知\* 東京

母から、ヘタを取つたら母です、母をとつたらそれはヘタです  
半額で買ったことだけ覚えてるいくらだったか覚えていない  
授業して会議してあくたくたの、手帳には今日の空白がある  
降ってきた部長のポスト振り払うわが小ささをわれば知るゆえ  
あすのあさばくが剝いてる純白の卵のなかの卵を思う

田宮 朋子 新潟

消雪の水の流るる砂利道に何かついでば花鶏の群れは  
フォグランプ点けつつ霽のなか走るきのふの夢のつづきの如く  
一昨日の記憶はおぼろ明後日は霽ひて見えず豆餅を焼く  
県内版おみやみ欄に並ぶ名のなかの一人おもかけの顕つ  
天霧らひ雪の降るにはあらねども庵をおもふけふ良寛忌

津金規雄 神奈川

お寺さんに分けてもらひし小さき実を六つ浮かべてプレ柚子湯とす  
風呂あがりにはさすがに少し若くなる鏡のなかの亡き父の顔  
買ひ換へし双眼鏡にて冬空に人生初のオオタカを視る

小山 富紀子 京都

オオタカはカラスの大ききオオタカが訛つたからと識つて納得  
直立する杉の大樹に掌をあてて聴くはほかならぬ我が身の鼓動  
殺戮を指示せし手にて十字切る聖夜のよるこび奪ひし手にて  
こんなにも人を殺して神に今なにを祈るやウラジミール・プーチン  
殺さねば殺さるとふ現実を見て育ちゆく子らの心は  
愛されし記憶求めてさ迷へる戦禍の街の犬たち猫たち  
あらたまの令和五年よパソコンに「せんか」と打てば直ちに「戦火」と

清水 正子 神奈川

千代鶴は四股名にあらざ花びらのひらひら長き白山茶花ぞ  
羽根のごと千代鶴の落花ありし日よ鳥インフルで丹頂たふる  
雪原の撒き餌ついでむ丹頂に子なきベアあて哀れ鳴きあぐ  
年老いてふたたびを訪ふこともなし雪の鶴居村サンクチュアリを  
思ひ出の中の笑顔よ雪国の千鶴子さん田鶴子ちゃん姉妹なつかし

小嶋 一郎 佐賀

ペテン師も詐欺師も医師と同じ「師」を付すはなにゆゑ問はれて窮す  
鶺鴒の木の梢にてガガと鳴くカラス朝より二度目敵意は失せぬ  
身の程を知るヒヨドリか餌台の下に一羽が来れば飛び立つ  
この窓も「心」を据ゑてきのふけふツバキ一輪見するやさしさ  
卓上のミカン一つを古い二人ともに手出さず載る二日目も

後藤 美子 北海道

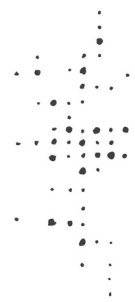
やさしさを求むる世ならん「より添う」がさまさまの場用ゐらるるなり  
へたる、をかすゝ意志を含めり(伴なむは客観的に皆(リスク)に続く  
「実力も運のうち」といふ發揮するチャンス得られぬ人もありなむ  
死に近く英女王新首相と会ひて笑む大きく広かりき一人の力  
ペレストロイカ、冷戦終結、ノーベル賞一つの枠にをさまざざりし人

藤野 早苗 福岡

冬潮の青澄める朝アクセルをやはらかく踏み海峡渡る  
あたらしき年を寿ぐ一葉は天女の在所羽衣町より  
師の在所羽衣町の旧き名は帰天の衣隠す(唐櫃)  
米寿なる師に真向かへばひさかたの天女森重香代子氏不老  
師の米寿祝賀歌会おのおのの三十余年をたづさへ集ふ

田中 愛子 埼玉

人棲まぬ家の納戸に冷えてゐん茶通箱、茶碗、風炉先屏風  
晩年まで母が購読してゐたる「週刊朝日」休刊となる  
日暮にはまだとほけれど灯を点し父に冷酒を供ふる命日  
キャベツ、ニラ、ひき肉買ひてレジ嬢に知られてゐるや今夜のメニュー  
杖がはりの自転車押せる老人を冬のゆふばえすつぽり包む



原 賀 璽 子 東 京

元旦の遠見の富士や富士みむとこのマンションを買ふ夫ありき  
黒ぶちの厚きめがねをかけたなら夫の眼でみる富士とやならむ  
めでたきは楯円のかたち子供たちそしてわたしの双つを容れて  
やはらかく戻しし昆布を銚もて切りしは内緒こぶ巻うまし  
まつすくな頃の(斜塔)をおもひつつ絵皿の塔のますく賞でたる

橘 芳 園 新 潟

水 上 芙 季 神 奈 川

檀家制封建遺制のガラス鉢に飼はれて泳ぐ僧らは金魚  
権力は人もてなすと金の閣金の茶室をしつらひたりき

溝の口駅から五分の溝口神社へ参る一月六日

板壁に金箔張りてかこふ闇金閣の闇は宗教の闇

ご祈禱の神主の所作やはらかに藤の格衣の影なす美しく  
焼き肉の紙エプロンのやうなものかぶりぬご祈禱受ける直前

金欄の袈裟をまとひて闇かくすわれの如くに金閣立てり  
僧われが羨しと真がほに言ふ人とうす笑ひうかべ言ふ人ともき

靴下の自分の足を見つめつつ鈴祓ひ受く 良い年となれ  
紙垂付きの櫛を順に置いてゆくわれの前後は社長であつた

水 上 比 呂 美 東 京

大 野 英 子 福 岡

正月の天気予報に魚沼の商店街の大雪おもふ  
ババ抜きをすればわかるよひろくんは嘘をつくと眉毛がうごく

スベードのジャックの眉がひろくんに似てゐる困つた八の字眉毛  
長男は長男の顔、次女は次女の顔をしてをりひろくんと芙季

親戚が茶の間に十四人集まつてババ抜きしたね爺も婆もゐて

鈴 木 竹 志 愛 知

松 尾 祥 子 東 京

資源ゴミ回収当番 公園で待ちわびてゐる良き隣人を  
来るはずの当番は来ずわれ一人大寒翌日の公園に立つ

段ボール紐で括らぬままなれど拒否はできないありがたく受く  
引越しの予定あるかと思ふほど資源ゴミあまた持ち来たる人あり

二時間で十人ほどが持ち来たる資源ゴミその量に満足したり

木守り柿一つのこれる歳晩の庭を音なく照らす月光  
百一の伯母は逝きたりははその母の九十四の誕生日

百一と九十九の元氣なる伯母たちが母の支へなりしが  
赤城風吹く十二月旅立てり同じ名前の古屋祥子さん  
母の友またひとり逝き正月のうさぎの耳のへろりと垂れる

鈴木 千登世 山口

一族の名の付く峠あるといふ未だ訪ねぬ祖父の村

指二本広げて地図を拡大しスマホの平に黒瀬峠を尋む

モノクロの写真に写る若き祖父右より左大きその目見

会ひしことなき祖父の目差しはわれによく似て息子にも似る

荒磯波寄する長門の黒瀬峠面輪親しき人に会ふべし

小島 な お\* 東京

明太子、送っておくね 年末はあずかり知らぬ夜が増えてく

柚子じゃないポンカンじゃないわからない柑橘を湯に浮かべて食べた

ケーキ屋ののちのメンタルクリニック四角い箱を膝に抱えて

マインドをフルネスにするそのための1泊2日の旅 粉砂糖

降りるんだね、火事するとき、らせん階段を。火事じゃないから、いまは見るだけ

斉藤 梢 宮城

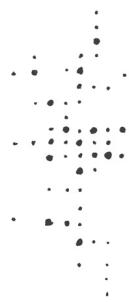
金色の月のスプーンで掬ひたし静かに忘れられゆくことを

二人子に五円渡してくぐりたる八木山神社の小さな鳥居

この子らを産みし日のこと思ひを痛みはとうに忘れたけれど

そよぎつつ蓄ひらきてベランダで生きてゐるなり冬の撫子

青葉城恋唄流れる新幹線ホームで手をふる別れるために



最近の会員歌集紹介

(令和4年9月〜12月)

尾崎潤子歌集 一三〇〇円

月夜野 柘書房

河合育子歌集 一三〇〇円

春の質量 短歌研究社

浅田みどり歌集 一三〇〇円

こころ花めく 柘書房

秀島美代歌集 一三〇〇円

ネパールの磔 柘書房

池野京子歌集 二五〇〇円

彼岸花咲く 六花書林

小沢京子歌集 一三〇〇円

コスモス咲けり 柘書房